

スポーツ＆レジャー教育の方向性と課題（4）

栗原 毅^{*1}

The Object and Problems of the Sport & Leisure Education 4

by

Tsuyoshi Kurihara

Abstract

Following the previous studies on the same theme, this study examines the object and problems of the Sport & Leisure Education. First, it analyses the current structure of the realizing of the Sport & Leisure Education. Second, it refers the problems, which may be emerging from the structure. Thirdly it tries to seek for the way of solutions.

The results of this examination are :

1) Within the framework of the current atmosphere the importance of the exercise is highly evaluated. This may characterize the unofficial belief of "behavior primary" among the teaching staffs : Let the students do something, before they understand the meaning of what they do. This attitude may be adapted to all the subjects.

Some undesirable side-effect may occur from the above-mentioned thinking. A feedback or revising task after the sessions may be often underestimated or even not conducted.

These symptoms were brought about from the fundamental philosophy of Sport & Leisure, which intentionally ignores the field of "knowledge. We have to find out the new way of education to "teach the idée of Sport & Leisure".

2) There may exist another un-described sanctuary. An area of English. Teaching English has no connection to the theory of Sport & Leisure Education, which is the core of the department.

We are assigned to establish a theory, which combines the philosophy of Sport & Leisure and importance of English.

3) The study suggests a communicative method, which may combine the philosophy of Sport & Leisure philosophy and linguistic teaching field, aiming to avoid these potential problems. These effort may lead Sport & Leisure education to the field of Liberal Arts, whose aims be rather to construct the categorical structure of thinking of the students, than to obtain the individual knowledge and information.

* 1 東海大学体育学部スポーツ・レジャーマネジメント学科

序

本考察は、スポーツ&レジャーの概念を解題し、高等教育で実践する手法を検討する継続的議論の一環である。

1 これまでの考察の要約

筆者はスポーツ&レジャー（以下 SL と略す）という概念を分析して、これを教育という手法で伝達する方途を探ってきた。主な主張と論点を以下にまとめる：

1) 当連続稿の目的

＝自律価値教育の実現可能性＝

価値を教育するという営為は教育の最終目的である。一般に教育は個別的教育目標を設定して、目標への到達の道程下で目的を体現させる。知識教育では論理術や知識知の獲得を「通じて」、芸術教育やスポーツでは身体を使う技能の獲得過程などの目標実現を「介して」教育目的を実現させようとする。

SL のような、新概念でかつ知としての対象領域や必須の知識知を持たない「むき出しの価値」を扱う当学科の場合、これを教育する場合にはどのような「攻略・戦略・戦術」が求められるのだろうか。この疑問を解題して具体的な方法論を提示することが当連続稿の目的である。

2) 検討過程

この目的下、筆者は SL を高等教育領域として教育するという営為について数次にわたって考察してきた。初めに、スポーツ&レジャーを「実存の瞬間」と概念規定した久保の宣言¹⁾を援用して、この概念の教育適用上の問題点を指摘した。すなわち：

- ①この概念は行為者がある瞬間に感得する心理的境界位であり、どのような実践に際しても存在しうる。すなわちスポーツ&レジャーは対象化可能な領域を持っておらず、教育作業上の目標と目的を設定することに難があること²⁾。
- ②従って、知識知を伝達することが難しく、評価が計測できないこと。

③次いでスポーツ&レジャーをマネージするという語の内容吟味を試み、一般的なマネジメントが所与価値を実現する手段の集合体であるのに対し、スポーツ&レジャーは自律価値であり、スポーツ&レジャーをマネージするという技は手段化不能な「実存の瞬間」を対象化する試みであり、概念矛盾に近いこと、この実現には行為者・学習者がこれに「内発的に気付く」ことを待たねばならないことを指摘した³⁾。

④さらに、SL 教育は知や技能を伝達することを目標としない価値教育であることから、必然的に宗教教育類曖昧さを内在させざるを得ないことを解題した⁴⁾。

⑤この曖昧さは、実存の価値という他者との共有を峻拒する立場と混淆して「どんなことでも一生懸命やればよい」などの野放図な寛容主義につながるが、これは教育というコミュニケーションを放擲しているという批判を免れない。

⑥曖昧さを回避するために、価値教育の多くは人格の超越教育（「XX 先生との出会い」）や徳目主義（「黙って従いなさい」）に陥りがちだが、SL は「行為主体者の自律」を本質とする以上、これを受容することはできない。

⑦前稿では、これら諸難題を克服して、喫緊の教育現場に対応するためには、教養主義的な過程知教育が最も「近道」なのではないかという提案をした⁴⁾。

2 本論文の構成

本論文では、まず SL で現在行われている教育手法の非明文な合意：正式に記述されている基本方針というより、教員間で暗黙裡に合意形成されている授業実施のありかたを概観して、その理由を探り、前項までで述べた SL 教育の本質問題と照応する。さらに筆者が試行している SL 教育との統合の可能性を探り、新しい価値教育としてのスポーツ&レジャー教育の方向性を構築してゆく。

3 現行 SL 教育の基本的性向

まず、スポーツ・レジャーマネジメント学科教員間で暗黙の裡に合意ができていられる基本的な方向性を列挙してみる；

1) 実習・経験の重要視

①二つの本質的欠陥：知識化と伝達性の課題

SL が明確な対象知識知を持たないことは既に繰り返し述べてきた。これはいくつかの点で学科教育の方向に大きな影響を与えている。

通例、ある確立された知の領域は、それぞれ定義群と用語また知的操作の手法の規範を保有している。SL にこれが欠けていることは、知的領域としての未成熟を示すものと言わざるを得ない。研究者・教員間の合意や教育研究深化のためにはこの種の規矩は欠かせないものである。また教育指導という観点では初学者への導入実践上大きな問題となりうる。入門的な、知識伝達を主体とした基礎的教育実施に大きな障害となる。

同時にこの状況は、衝に当たる教員の懈怠を示すものでもある。基礎用語集や共通語彙などは学科創設 15 年を閲した 2017 年に至っても未だ整っていない。

しかしこの「欠陥」は、久保が SL を「実存の瞬間」と定義した時¹⁾から決定づけられていた本質的問題である。SL に対象化可能な領域を取って設定せず「どんなことでも良い・一生懸命やることに価値がある」というイデーのもとに対象領域限定を拒否した。この立場は凡そ伝達・コミュニケーションという人間の業とはなじまない。むしろ教育という伝達事業とも乖離している。

この「領域なき知」を教育せねばならないというディレンマが、SL 教育には常に付きまとう。

もう一つの障害は価値伝達という軌道を周回する。SL を「人生の喜ばしき瞬間」と称揚する。価値である。しかも個人がある行為に没頭することによってのみ感得できる「瞬間的垂直的価値」とする。ここには他者の存在が念頭にない。従って教育という「継続的水平的な価値伝達作業」にはもともとなじまない。この種の価値は知識のように理性的体系的な方法では教授伝達できないのである。これについては前稿で述べた⁴⁾。

このように SL 教育は知識伝達をめぐって考慮すべき諸課題を内在させている。この障害物を克服したいという動機は学科歴代教員の多くが潜在的に共有するところである。

②代替策：直覚主義的教育姿勢

その結果、ある種の代替策が教員間で暗黙の前提として共有されることとなった。「体で覚える」というテーゼの全面的容認である。「知識教育」に代替して「体で覚える」「実践で体得させる」というエートスが濃厚に存在している。これを倫理学のコンテキストで表現すれば「SL は価値教育である。価値は直覚で体得されるものであり、理性的伝達では伝達しえない。従って学生には実践を通して体で覚えさせることが最善の教育方法である」ということになるのだろう。あるいは体育学部という「身体を介した教育」に携わる集団という基調が反映しているのかもしれない。いずれにせよ学生をして体で学ばせるという姿勢は堅固である。

2) 学生希望とのマッチング 英語教育と海外実習

スポーツ・レジャーマネジメント学科が英語教育に注力していることは事実である。1 年次から 4 年次まで必修英語科目が設定され、英語母語話による講義も必修科目に入っている。

学生・保護者からの英語教育への期待は大きい。高校生を対象にした各説明会でも間違いなく出てくる質問が英語教育の充実度に関するものである。逆にこちらから、なぜ英語を学びたいのかと尋ねるとこれもほぼ異口同音に「将来国際的に活躍したいから」という答えが返ってくる。毎夏に学科で行っている 2 週間にわたる海外実習への期待も高い。数十万円という高額な費用負担を強いるにも拘らず希望者は毎回数十名を数える。「学生のうちに国際的経験を積める」という惹句が有効に機能しているということだろう。

4 現在の実践方法に潜在する課題の検討

1) 実習優先主義の問題点

SL が価値伝達という茫漠たる「目的」しか持たず、領域がないために「目標」設定も難しいことから、実習主義はいわばやむを得ない方便として行われている。知識を持たず、伝達しえない価値を伝達するには直覚的に体で覚えさせるほかはない、という方向である。弥縫的であるという批判は免れない。しかし、徳目主義的なリゴリズム

に陥ったり、教育者自身の人格に頼る非継続的な手法に委ねるという安易な方向を採用することはSL教育の自家撞着につながる。これについても前稿で詳述した。他に有効な手立てが見いだせない以上、やむを得ない方便としては容認すべきであろう。

むしろ、SL教育での実習主義の問題は「やり放し」の危険を孕んでいる点にある。SLの実習は例えばスキー実習などと異なり、技術習得を目指さない。何かをうまくやるための手段ではない。HOWTOを峻拒する学科の立場からは当然である。「～のための実習」というマネジメント的な立場とは一線を画しているわけである。SL教育が抽象的な教育目的を語ることはできるが、具体的な教育目標を設定することが不能に近いことは本連続稿の初稿で述べたが、まさにこの点で「放任の危険性」というSL実習教育の潜在的弊害が具体化する。ある作業を行う。作業を行ってなにがしかの「体で実感する」経験を得る。しかしそこで終わってしまったのでは教育の名に値しない。その体験が何ものであったかを学習者が言語化し、他者に伝達できるようにならないならば、実習は「やりっぱなし」の謗りを免れない。

実習は「参加し・ともに行う」こと自体が最重要であることは首肯できるとしても、その学習効果を何らかの形でチェックすることは教育者の責務である。当該実習での「目標」は果たせたのかどうか。実習体験の価値が学習者に再現可能な形で「根付いたか」。SLの中核概念である「実存の瞬間価値」と「他者との共有」にわずかにでも近づけたかどうか。その検証は極めて難しい。

SLのような定義不明領域で行う、目的も目標も定かでない実習は、教育効果の検証が難しい。従って放置されがちになる。「とにかく実習は意義あるのだ」という点では合意できるが、どう意義あるのかについては議論で回答を得ることは難事だろう。繰り返しになるが、価値教育は「理詰め」では実現することが難しいのである。

語を変えれば、SL実習という表現そのものが矛盾しているということもできる。いったいに、実習の多くは目標設定可能な領域で実施される。手法の実習である。スキーのやり方、スキューバ

ダイビングの資格取得、英語検定準備や入社試験模擬面接まで、至る所で行われている。HOWTOの実習である。「～のための」他律的教育である。SLとは異なる。

2) 学生希望とのマッチングの問題点

ある教育を施すということの理由を「学生や保護者からのニーズが高いから」とする立場がある。教員の日常で、様々な機会に繰り返されるこの主張を文章にすると以下のようになるだろう；

いわゆる少子化社会に在って、大学も入学者を定員に満たす努力をせねば存立できない。従って大学に勤務する教育者は経営的視点を持たねばならない。従って潜在顧客である高校生や保護者の希望は尊重させるべきである。従って学科は学生と接する現場として、ニーズに沿った顧客サービスを提供するべきである。

私学の現況分析としてこの見方は基本的には正しい。しかしこの視点をSL教育に応用する際は、SL的論点消化を施すべきである。理論的立脚点が必要なのである。でなければ原理としてのSLが排斥してやまない他律的な手段教育が実現してしまうことになる。

例を挙げよう。スポーツ・レジャーマネジメント学科は設立以来英語を「重要視」してきたが、これはSLの視点から見て「正しい」ことなのかどうか吟味してみる。

英語重視の最大の理由が「ニーズとのマッチング」である。

一般に、ある学習機関が、複数の並立する教育目標掲げすることは別に問題ではない。並立する個々の目標が互いに無関係であっても構わない（例えば「本学の目標はバナナ調理の多様性を広めることと、交通ルールを守る人材を育成することである」という、お互いにまったく関係がない方針があっても良いということである）。

筆者が気になるのは「国際化のために英語は必要」という、一見説得性を持つ旗幟の中に、SLとは根本的に相容れない「～のための教育」、他律主義が無批判に受容されている点である。

SLは実存であり自律価値である、と謳う。「～のための手段」ではないとする。小気味よい。簡にして潔。この一言こそ、SL教育のあらゆる理論的純良と実践的障壁の源である。

ところが自律価値を謳う一方で「国際化のためには英語」と語ることを愧じない。この無自覚に違和を感じる。

SLの価値を教育するという種々の努力の中で、英語教育を強化するという結論がでたならそれは首肯できる。が、「国際化時代だから」という不可解な根拠のみをもって英語をアブリアリに認めてしまうことはうなずけない。学科の中で英語教育は他律性を開き直って違和の光芒を放っている。SLに携わる者がこの無自覚を看過することはできない。無根拠のままに英語教育を現状追認することは、英語は聖域無謬という無批判の跋扈を許し、学科の方向性を過つことにもなりかねない。

なぜSL教育の中で英語が必要なのかという根拠が摘出され、その根拠に従って授業が実践されねばならないのである。

さらに続ける。SLが価値教育を標榜するなら「学生の希望とのマッチング」という考えは一度再検討されるべきだろう。これは、提供者は受容者に受け入れられる提案や商品を製造するべきだというニーズ⇔シーズというマーケティングのコンテキストである。他律性を容認している。価値教育を手段に隷属させてはいけないなら「学生の希望だから」を錦旗として教育の方向を決定するという立場を無批判に受け入れるわけにはいかない。それが実習重視であろうと英語教育であろうと「原理」が先行構築されているべきである。

学科創設10余年を閲してなお、この点について議論が深まっていないことは教員側の懈怠であり無恥である。自戒せねばなるまい。

3) マネジメント（管理・目的遂行）という語が抱える誤解の萌芽

マネジメントという語は広義である。学生や保護者はこの言葉から「イベント運営の方法」や「組織の効率化」などの手段のことを思い浮かべる。志望動機の中にも組織管理のHOWTOとしてマネジメントを考えているものが多い。2020

年の東京オリンピックを控えて、時代背景が「スポーツイベントのマネジメント」志向を後押しすることも理解できる。

しかし一般的な理解と当学科が持つ方向性とは異なっている。このこともすでに本連続稿の中で述べた⁴⁾。要約するなら、当学科で考えるマネジメントとは「個人が他者との理解と共感を得るためのコミュニケーション上の必要な気配りと手法」である。組織運営上の目標達成管理手段集や集団作業の効率の運営を教えるものではない。

学科で使われる語意が一般的な意味と乖離している状態はやはり問題である。教員は教育の中でこの概念の差を解題して、SLの考え方を学生に過不足なく伝達してゆく責務があるだろう。

5 方便としての提案 基礎教養としての言語教育

ここまでは、SL教育実践の中で暗黙の了解として通用している考え方を批判的に検討してきた。すなわち；A「実習重視」という方針はSL教育の理念には合致するところがあるが、言語によるフィードバックを施さなければ「やり放し」の放逸・無責任教育に墮する危惧があること、B英語教育に顕在している「学生の希望とのマッチング重視」は、手段教育を聖域化する危険を潜在し、SL教育の自律性と矛盾すること、であった。

1) 方便の必要性

SLは価値である。価値は直接伝達できない。価値教育は「～を実現するための」他律的教育であってはならない。価値を直接教育しようとするものは徳目主義と人格主義の弊に陥る危険がある。

現行のSL実習は放置/無責任の危険を潜在させ、英語教育は他律の危険がある。

SLの「実存的価値」なる教育目的を正面から捉えて実践に供しようとする上述のような種々の条件に遭遇する。

ここではこれら諸条件に抵触することを避けつつ、SL教育を実施するための基礎的手法について考えたい。方便を講じるわけである。

2) 方便としての言語教育

「価値は言葉にできない」とコトバで語る哲学は多い。ここにある矛盾を認めるかどうかは別にして「非言語的体験を言語で説明する」という業は、価値の哲学には常に付きまとう。

鎌倉仏教のいくつかの実践的宗派（禅の「不立文字」、浄土系の「報謝念仏」「至心信楽」）を除いて、多くの論者がコトバにならない体験をコトバを使って説き・解説し・主張する。西田幾多郎などは、絶対的に矛盾しているものこそが自己同一である、とまで言う。情緒主義倫理学は、自己否定にも似た主張（「倫理に合理的な根拠などないのだ」）を詳細な言語分析と論理で、すなわちコトバを尽くして記述する。実存主義は自分で勝手に発見した内向的な価値の瞬間を無理矢理他者に伝達しようと必死になる⁵⁾。

スポーツではその種の瞬間を「ゾーンにはいる」などと称揚するが、なかなか他者に伝達することができない⁶⁾。

このあたりで認めねばなるまい。SL の価値はどうやら直接コトバで伝達することはできない—徳目主義や人格主義を排除した場合、価値の直接伝達は秩序だった教育にはなじまないのである。

しかし SL を伝達（教育）するという責務を放棄することはできない。ならば「次善の策」を考慮すべきであろう。ここでは直接的に価値を感得させる教育ではなく、価値伝達を容易に行える基礎を形成するという「目標設定可能な」方向を考慮するべきではないか。

SL の根本は「実存的瞬間価値」。なにごとによらず「打ち込む」ことに意義があるとする。そこから2次的に「打ち込むことの価値を他者と共有する」共感形成能力の意義が生じてくる。SL はこの点で「孤高の実存価値」から逸脱している。SL では（派生的にはあるが）他者との関係を考慮する。コミュニケーション能力を重要視する³⁾。

コミュニケーション能力の涵養には言語教育が不可欠である。

SL のコンテキストで語るなら「他者の価値は付度しえない。しかし自らの価値を他者に伝達し、他者の価値を知って尊重する手段は発達せねばならない」。

言語教育が SL の「方便」：インフラストラクチャーとしてふさわしいと考える所以である。

6 言語教育化の適用

ここでは3, 4で前記した①実習のやり直し・無責任化対策と②SL 的英語教育の根拠提示という課題に対して言語能力教育がどうかかわるかにについて考えたい。さらに、現在筆者が行っている講義演習の中で言語教育をどう配置しているかを報告する。

1) 実習のフィードバック

ここでは言語化の意義は明白だろう。体験はそのままでは情景記憶でしかない。これを保存・伝達するには言語に加工するしかない。経験を客観化させ、言語として記述させ、他者に伝達させる。言語化作業自体が学生の錬磨となる。

教育提供側から見れば学生からの評価が蓄積可能となり、改善につながる。目的が曖昧で目標設定に難がある SL 実習では、常に学習過程を言語化するという作業を徹底してゆけば、作業自体が有効な教養教育となりうるだろう。

2) SL 教育から見た英語教育の根拠づけ

なぜ SL 教育と英語がつながるのか。「国際化」「学生からのニーズ」という他律的な理由以外に SL 教育の中に英語を取り入れる根拠を検討する。

①異文化価値の紹介としての英語による講義

英語圏の SL 価値に関する講義を英語で行う。これは価値教育ではないが、異なる価値を紹介する情報提供としては有効である。現在英語で実施されているいくつかの学科講義がこれにあたる。これは英語教育というより、英語を用いた異価値紹介の講義である。

②母語教育としての外国語教育

5-1) で述べた SL 言語教育の一つとして、英語を改めて位置づけることを提案したい。母語教育の対照素材として英語を使用して、それぞれの論理と語彙を比較する。実験系の手法：コントロールグループを設定して比較することにより対象群を明確に把握することができるようになるのと同一である。

外国語と対照するという作業は、母語と母文化を知るうえで有効である。例えば日本語の特徴である「主語不在」という性質と英語の仮主語 It~that 構文とを比較すると、日本語のニュアンスと英語の論理の隔絶が理解できよう。時制と相(アスペクト)、自動詞受け身などの日英の顕著な差異を認識することによっても、コミュニケーション上配慮すべき諸点に関わる「気づき」を学生に与えることができるだろう。日本語の特徴を自覚的に、言語として把握するという経験は SL 教育の基礎として有益ではないだろうか。

3) 実践事例

ここからは筆者が SL 基礎教育として実践している教育事例を報告する。

①講義：マネジメント論 (素材：メディア)

サービスシステム論 (素材：サービスという概念、サービス産業)

講義は「頭脳運動」として位置づけ、定義の定義、差異の認識、共時比較と通時比較など、弁別と思考の基本的な概念を「頭と体と心で覚える」ことを目標に設定する。この過程知習得が目標なので、対象としての知の領域はそれ自体が秩序立って解説可能であれば内容は自然科学的であろうと社会科学であろうと構わないというスタンスで行っている。また知識の細密さや深浅も「入門」レベルにとどめている。(この点は高等教育提供者としては批判を受ける余地があるだろう。)要するに講義の内容は言語反芻の素材であり、それ以上の甚深な知を提供するものではない。

常に言語化を心掛けさせ、ノートテイクを指示する。授業は可能な限りコミュニケーション的な方向を目指す。初等言語教育では有名になったフィンランドメソッド⁷⁾を高等教育の講義に応用しているようなものになっている。

例えばサービス産業の定義を示す際は、まず学生に事前に情報を与えずにサービス産業とは何か、を純粹想起させて記述させる。いくつかの「定義」を例に挙げ、サービスという営為に特異な性質を抽出して一般解を導く。この一般解は複数になっても良い。重要なことは、思考を試行するという過程知であり、結果としての定義は単に「あ

る集団で合意された一種のフィクション」でしかないことを学生に認識させる。

②演習：イベントマネジメント演習

演習形式の授業では広義のコミュニケーション能力の強化を目論んでいる。言語能力は、読解・聴取の2受動能力と記述・発話の2能動能力の4能力だが、演習の各ステージでの話し合いでは自分の意思を他者と共有する、あるいはチームの意思を第3者に提案するという、伝達能力育成に傾注している。具体的に記述すると、まず企画作業では意見交換と合意形成作業を繰り返す。ブレインストーミングやチームでの KJ 法などを多用して、アイデアを言語化して他者に説明できる段階にまで具体化するように指導する。提案段階に移行すると、記述：企画書や提案書作成という作業を通じて論理的説得性を訓練する。提案の実施段階では発話の論理的説得力に加えて感覚的な説得力および発話態度などの非言語コミュニケーションにも注力する。

演習で発達を促したい能力を一言でいうと「相手のことを慮る」姿勢である。これは SL 的コミュニケーションの非言語的基礎でもある。

③個人の言語技法訓練：フォーマルディベート、クロスファイアなど

3年次生の研究ゼミナールでは、ほとんどの時間を個人の言語技法を上昇させることに充てている。SL 価値を他者と共有する能力：言語化と他者への伝達、さらに共感形成する力は、すべからく言語能力が基礎になるという理由による。

フォーマルディベートでの目標を列挙する：論題選定作業の中での合意形成。論点整理作業では要約発話力。論戦本番では時間制約の中での論理的発話と批判・再批判対論の訓練などである。無論日本語のハイコンテクストな性格を配慮しての適切な語彙、敬語やフォーマルな日本語使用にも配慮する。

クロスファイアと名付けた、個人対チームの変形ディベートでは、個人「プレゼンター」の提言に対してチーム「アタッカー」から一問一答形式で批判を加えて再反論を繰り返す。ジャッジを設定して最後に勝敗と理由を説明させる。

テーマはプレゼンターが自らの問題意識に基づ

いて選定する。事前にオリエンテーションを施しておき、領域限定と論点整理を合意したうえで実施する。プレゼンターの主張の骨子は事前にアタッカーに知らされているが、論理と根拠などは不明なので、むしろアタッカーチームの方が事前に学習すべき範囲が広範になり、渉猟に追われることになる。

ジャッジは両者の主張を吟味したうえで勝敗決定と理由を詳細に報告する義務がある。毎回ジャッジが結論を報告するまでの協議に相当時間がかかる。

クロスファイア演習を開始する前に、当該学生たちにはプロンプトスピーチや情報要約スピードなどの演習を施し、映像記録を残す。学期の最後にクロスファイア前と後の様子を比較すると、情報の要約、論理、パブリックアドレスの作法や対人スピーチの自信などの諸点で著しい改善が見られる。

以下に 2016 年に実施したクロスファイアのテーマとプレゼンターの勝敗を挙げる：

上記のテーマからわかるように、クロスファイ

テーマ	プレゼンターの勝敗
コンビニの 24 時間営業は過剰サービスである 廃止せよ	○
コンタクトレンズは治療器具である 保険適用せよ	×
人工透析は長期にわたる奢侈の結果である 医療保険対象外とせよ	×
給食は必須な教育領域である 全高校給食を実施せよ	×
65 歳以上の自動車運転は危険である 禁止せよ	○
五輪選手の国籍変更は趣旨にもとる 認めるべきでない	○
人口増と貧困対策として一夫多妻制を導入せよ	○
天皇制は天皇の基本的人権を剥奪している 廃止せよ	×
カジノ法案は弊害のほうが多い 廃止せよ	本論文執筆時未実施

ア演習は「価値議論」の演習である。価値の衝突は社会では珍しくない。価値教育を標榜する学科として、演習形式で価値の論争を行うことは SL 教育上有効だと考えて計画した。価値の判断軸に

は善/悪；絶対価値の把握、巧/拙；マネジメント型手段判断、そして好/悪；直覚と感情の 3 者があるが、プレゼンターとアタッカーには可能な限り好悪を排除するように指示して、秩序ある論理的な議論を促進する。ジャッジはこの限りでなく、感覚的な好悪で判定することも許している（しかし当然ながら感覚的理由も言語で説明しなければならない）。

クロスファイアは、評価と判断には必ず価値の説明が伴うのだと言うことを体得させる演習としてデザインしている。これも SL の価値自身を習得させるものではないことを付記しておきたい。繰り返すが SL は個人が感得する孤独の価値である。この演習を含む教育の現場では前記「第二の領域、方便」としての言語能力を涵養することを目標としている。クロスファイアではさらに進んで、価値への合意形成というコミュニケーションに焦点をあてているわけである。

7 価値教育と言語教育

価値は伝達しにくい。論理だけでなく感覚や感情、TPO や立場が輻輳しているからである。一方で人生は価値判断の連続である。人は「効率的で筋の通った」価値判断の根拠を探して一生を過ごす。

教育は価値に基づいている（と称する）。しかしその価値は常に徳目の陰に隠れ具体性に乏しい。教室で愛や平和を説くのは容易だが、外では愛と愛が戦い、平和と平和が血みどろの衝突を繰り返している。

SL 教育を価値教育と規定してしまった以上、SL には価値の伝達という責務から目を背けることはできない。しかし、この連続稿で論じてきたように、価値の直接伝達は不可能事に近い。

本稿は方便としての言語教育を SL で実施することにより、学生が将来価値と価値の衝突に遭遇し判断を迫られたときに、より「良い」価値判断ができるようなりテラシー能力を習得することができるという立場から記述された。基礎的情報操作能力という性格を押し進めた場合、SL 教育とは教養教育に似た外観を得ることになるかもしれない。

注

- 1) 「スポーツ&レジャー教育の方向性と課題」
久保・栗原・恩田・松浪・伊藤 「スポーツ&レ
ジャー教育の課題と実践について」 東海大学体
育学部スポーツ・レジャーマネジメント学科刊
2012
- 2) 「スポーツ&レジャー教育の方向性と課題 2」
栗原・伊藤・恩田・松浪・久保 前掲書 2012
- 3) 「マネジメント概念の検討」 伊藤・栗原・松
浪 東海大学体育学部紀要第 41 号 2013
- 4) 「スポーツ&レジャー」教育の方向性と課題 3
栗原 東海大学紀要体育学部 第 44 号 2014
- 5) 「死に至る病とは絶望の事である」(キェルケ
ゴール) 「自覚した市民の対他認識としての即
自・対自」(サルトル) 「死を自覚する先駆的決
意」(ハイデッガー) などさまざまな意匠が提起
されているが、いずれも伝達に難がある「実存
の境地」を伝達しようとしている。実存主義は
文学と接するギリギリのところで論理と秩序を
持った価値の伝達を試みた努力だといってもよ
い。

- 6) 久保は、実存的体験を得たものは、その結果
いわば観相回向の側面として、他者との同質性
を感得するようになると言っている(2016 年 2
月 久保最終講義記録)が、そこで得られた
「同等なる他者」との関係がどのようなものにな
るかについては沈黙したままである。
実存的価値を称揚する立場は一般的に社会的関
係性への関心は希薄だが、ここにもその傾向は
出ている。久保はさらに、久保が称揚する実存
的価値は他者には伝達不能である、と受け止め
られる発言をしている。「この体験は 全日本ク
ラスのアスリートでも一生に一度あるかないか、
でしょう。コーチングに応用するのは難しいで
しょうね。」(2016 年 2 月 久保最終講義)これ
はそのとおりであろう。実存は教育できないの
である。
- 7) OECD の国際学力テストで読解、科学、数学
ともに連続上位に入ったフィンランドで実施さ
れている初等教育の手法。コミュニケーション教
育の一種で言語の諸能力を統合して教育する。